

# ユーラシアを歩く会 行動報告書

## The Trans-Eurasia Walking Journey Program

## 1. 計画コース概要

提出日:

地域分類	日本東部	区間番号	3-1	
実施期間	2011年 6月 4日～ 6月 8日			
計画区間	出発地 木曾福島関所跡 ～ 到着地 妻籠本陣跡	参加人数	2名	

## 2. メンバー表

No	役割分担	氏名	期	備考
1	リーダー	友松 知宏	8期	
2		友松 和子	—	

## 3. 現地での歩行結果

(注: →は歩行、⇒はJR,バス、レンタカー等)

	年月日	出発～到着	区間距離	天候	宿泊
1 日目	6月 4日	米子駅前(日交バス) 22:50 出発 ⇒	0.0km	晴れ	
2	6月 5日	4:50 大阪難波着 6:00 新大阪駅発 (のぞみ200) 名古屋経由 8:28 木曾福島駅着 駅前案内所⇒タクシーで移動 9:30 木曾福島関所跡発 11:30 木曾の棧 12:50 寝ざめの床 越前屋蕎麦店で昼食 15:50 立町吊橋 16:00 須原宿鍵屋の坂着	25.0km	くもり	民宿いとせ 0264-55-3686
3	6月 6日	8:10 須原宿鍵屋の坂発 9:30 天長院 10:30 道の駅大桑 (昼食) 13:30 十二兼駅まえ 14:15 柿其入口 16:00 和合(園原家) 17:50 妻籠本陣跡着	20.6km	くもり	民宿阪本屋 0264-57-3111
4	6月 7日	[以下観光歩行] 7:50 阪本屋=妻籠観光案内所(藤原義則さん) 8:50 同発 11:00 一石枋茶屋跡(鈴木省吾さん) 12:15 馬籠峠 13:35 馬籠宿高札跡 (蕎麦屋で昼食) 15:30 藤村記念館発 17:00 落合宿本陣 18:15 JR中津川駅着	22.0km	晴れ	プラザホテル 中津川 0573-66-3111

5	6月 8日				
	7:15	プラザホテル出発(レンタカー)			
	8:00	神坂峠			
	8:40	恵那山第一ピーク (1時間滞在)			
	10:20	万岳荘			
	11:00	富士見台頂上 (40分滞在)			
	12:00	神坂峠 ⇒			
	13:00	かやの木町ライフレンタカー ⇒			
	13:30	中津川駅着			
	14:07	同発(しなの12号)⇒名古屋(のぞみ37) ⇒岡山(やくも)⇒			
19:15	米子着				
		合計 観光歩行	45.6km 21.0km		

[区間概念図]



## 4. 見聞録

### ルートの状況

木曾路はすべて山の中である。あるところは岨（そば）づたいに行く崖の道であり、あるところは数十間の深さに臨む木曾の川岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入口である。一筋の街道はこの深い森林地帯を貫いている。（夜明け前、第1部序の章）

今回歩いた木曾福島～中津川はまるごと島崎藤村「夜明け前」の世界である。主人公青山半蔵は馬籠本陣に生まれ、妻お民は妻籠本陣から嫁入ってきた。中津川は美濃の国であるが、馬籠との交流がさかんで、半蔵の師宮川寛齋や友人の蜂谷香蔵、浅見景蔵がいた。木曾福島には馬籠や妻籠宿を監督する勘定所があり馬籠との行き来が盛んであったが、そこには関所があって「入り鉄砲に出女」を厳しく取り締まっており、一般の住民には地域の北限であった。

中山道は大雨の度に氾濫する木曾川をさけて高所につけられ、避けられない箇所は、棧（かけはし＝谷の絶壁につけられた丸太と蔦の栈道）を伝い歩き、宿場も安全な山の中腹に並んでいる。土木技術が進んでから新しい国道は川沿いに建設され、近代化から取り残された街道筋はそのままの姿で現代まで眠っていた。道は自然に埋没したり、鉄道に寸断されて失われた箇所もあり、あるところでは草地の踏み跡をたどり、あるところでは踏切のない線路敷をわたり、あるところでは家の庭先を通り抜け、あるところでは建物と歩道の鉄柵の隙間をすり抜け、あるところでは線路下のトンネル水路につけられた仮設歩道を柵につかまりながら歩き、あるところでは地響きをたててばく進するコンテナトラック軍団の切れ目をみて小走りに国道を渡り等々。しかし道のほとんどは喧騒をはなれた山中にあって、登り降りはあるてくたびれはするが、心をいやされる風景のなかの歩行であった。

今回歩いた宿場のうち長野県側の六宿には「おみやげ屋」が一軒もなく、コンビニ店もない。妻籠の寺下地区に和菓子屋さんがあるが、いわゆる観光みやげは置いてない。家内と一つずつ買い求めて店先で頂いたが、土地柄にマッチした柿と栗の深い味わいの菓子である。聞かなかったが、由緒ある老舗でないかと思う。

財団法人妻籠を愛する会が建造物を管理し、かなり頑固に景観を守っている。お会いした観光案内所の藤原義則さん（妻籠を愛する会常務理事）や、一石枳茶屋の鈴木省吾さん（妻籠を愛する会副理事長）、お会いしてないが理事長の小林俊彦さん、宿泊した民宿阪本屋の阪本昭男さんらの並みならぬ努力があって、今の姿があると感じた。

峠をひとつ越えた馬籠宿にはみやげもの店もコンビニもある。長野県から岐阜県に越境合併した馬籠は観光協会連盟で妻籠と連携してはいるが、観光に対する姿勢がかなり変わってきたのではないかと思われる。

妻籠寺下地区に始まった街並み復元の40年を超える歴史はたいへんな重みをもつが、これからこの資産を引き継ぐ人たちの苦労を思うと、頑張っしてほしいとただただ頭がさがるのみである。

### 自然環境

木曾の自然は山の緑と、それにもまして美しい木曾川の水である。自然と歴史がこれほど融和しているところは珍しい。江戸時代の街道が自然に埋もれて、そのまま現代に発掘されたようだ。

世界歴史遺産登録の話もあるように聞くが、その価値は十分ある。歴史的なエピソードがどれだけ発掘できるかにかかっているのでは。

宿場の街かどには水舟（直径7～80cmの丸木をくり抜いてつくった水場）があり、花も植えられて、旅行者の目を慰めてくれる。

### 食べ物・酒・その他

須原と妻籠の民宿に泊まったが、それぞれに良心的な食事を出して頂いた。須原の民宿いとせは電力会社関連の宿泊所にもなっており、女将の大前佳子さんの家庭料理はお袋の味がした。妻籠の阪本屋は築150年の歴史ある建物が売りで、外国人も泊るとのこと。食前酒のワインとアユの塩焼きがよくマッチしていた。

街道の宿場一帯ではおぼ祭の最中で、福島宿の屋台で朴葉まきを求めて歩きながら食べた。なんとも素朴な味わい。大桑道の駅で五平餅を食べたが、焼けた味噌だれが香ばしく、これも素朴な味。

寝ざめの床の蕎麦屋「越前屋」。江戸時代から続く店というので期待したが、残念ながらよくない。価格、味ともに頭をかしげた。

須原宿の蔵元でどぶろく味の「そま酒」をクール便で自宅に送らせた。飲み友達を招いて開栓。しっかりした飲みごたえ。これはよい。700mlで1300円は値打ちもの。送料が高いため2500円についたが大満足。次の新酒を取り寄せようかと思う。

### メディアの取材

今回はなし。

## 5. 人々との交流の記録

### 訪問先

予約して人に会うということはしなかった。短い旅程のなかでいろんな方にお会いしたが、すべて偶然の出会いである。

藤原義則さん＝妻籠を愛する会常務理事  
鈴木省吾さん＝妻籠を愛する会副理事長

藤原さんには妻籠観光案内所でお会いした。土地の守り神「オシャゴジさま」のいわれを宿の主人に尋ねるが、「よくわからない。隣の観光案内所で聞けばわかるだろう」との返事。早朝から案内所が開いているとは思わず、あきらめていたが、朝宿をでると案内所が開いている。立ち寄ったところ、長身の男性が一人事務所の清掃をしていた。それが藤原さんだった。1時間ほどお話を聞き、後日資料を送っていただく約束をしたが、帰ったその日に最初の資料が届き、引き続き2度にわたってたくさん資料が送付されてきた。

鈴木さんには、その日の昼まえに馬籠峠の手前の一石茶屋を通りかかったとき、声をかけて頂いた。お茶を頂きながらここでも1時間余お聞きした。そのうえ正調木曾節を歌って頂いた。哀調をおびた、心に沁み込んでくる唄である。「あわせ・・・」とは着る袷のことで、四国から移ってきた中のりさん（筏の船頭）が寒いだろうと気遣った家族の思いの唄とのこと。しみりとお聞きした。

お二人には今一度お会いして、続きをお聴きしたいと思っている。

木和田拓海君＝南木曾小学校3年生  
園原大進さん＝園原家ご当主

南木曾小学校のあたりで下校途中の数名の小学生に出会った。なかの一人が和合まで帰ることによって道連れになった。それが木和田拓海君。園原家に案内され、庭の手入れをしていた当主の園原大進さんに引き合わせてくれた。

園原家は代々神官のお家柄で、江戸中期のご先祖に京都で学び、木曾路の歴史を編纂した国学者がおられる名家である。歴史建造物のお宅を見せて頂いたが、きわめて簡素で、「なるほど、神に仕える方の住まい」と頷いた。冬が寒くて、いまは別場所にお住まいとのことであった。

齋藤 稔さん＝藤村記念館理事

藤村の兄弟の孫にあたる島崎古巡さんの水彩画展会場でお会いした。絵は藤村の足跡をたどる風景画で、豊かで透明な色彩が藤村の作風を連想させる。表通りの観光客の賑わいから離れて奥ま

った静かなたたずまいの記念館で、ゆっくりと藤村の世界に浸った。

#### 石川正行、倭子ご夫妻＝旅行者

初日、木曾福島の案内所でお会いした。名刺がわりに差し上げたユーラシアを歩く会の趣意書の私の名前を見て、「友松姓が、名古屋の中村区に多い」と言われる。何を隠そう、我が家の家系は紛れもなく名古屋市中村区で、そこから米子にやってきた殿様の家臣であった。人に我が家の家系について言われたことがなかったので、大いに驚いた。

#### 景山ご夫妻＝旅行者

大妻籠を過ぎて宮本武蔵ゆかりの男滝への入口で出会い、双方から声掛けした。東海道を歩き終り、いまは中山道を、京都から東京へ向かって歩行中とのこと。やはり、そういう人もいたのだなと思った。定年をむかえておられるのだろうが、まだまだ活力にあふれた盛年である。

## 6. 健康・安全面の記録

特になし

## 7. 総費用

団体（2名）	交通費（米子～木曾福島）	52,000
	宿泊、飲み物費（3泊）	49,000
	昼食等	7,700
	レンタカー、ガソリン	9,000
	その他（入場料等）	1,000
	合計	118,700

## 8. その他

今回の歩行にあたり、境港市の中村勝治市長さんのご好意でメッセージと妖怪バッジを頂き、歩行中にお会いした方々に鳥取のみやげとして差し上げ、鳥取に遊びに来てくれるようお誘いした。